

「世界システム」論と「国際関係論」から見た西洋近代史

歴史はその立ち位置によって見え方が変わってくる。「マホメットなくしてシャルルマーニュなし」これはベルギーの中世史家アンリ=ビレンヌが提唱した言葉である。1922年、論文『マホメットとシャルルマーニュ』で発表。

彼は西欧中世の始まりを、ゲルマン民族の侵入と西ローマ帝国の滅亡（紀元476年）にあるのではなく、^{※1}カロリング朝時代のイスラム教徒の地中海進出・制覇、それによるヨーロッパ人による地中海貿易の途絶にあるとした。この結果、西欧は地中海から切り離されて、内陸農業国へと変質し、カール大帝（シャルルマーニュ・742～814年）がこれに対応した国家建設を行ったと考える。したがって、カール大帝の登場は、イスラム勢力の進出という外部衝撃なくしてはありえなかったと説いた。この学説は大きな反響を呼び、その後、批判説も出されたが、イスラム勢力の地中海進出が西欧中世史に影響を及ぼしたという点は、評価されている。

今日は、砂糖というひとつのモノ、つまり、世界中で通用する商品を通じて近代世界史を見てみようというのが目的である。ここでは、「世界システム」論といわれる歴史の見方と、歴史人類学の方法を使って、こういった歴史へのアプローチを試みようと思う。「世界システム」論というのは、アメリカのイマニュエル・ウォーラーステインという学者などが中心となって作り出した考え方で、近代の世界史を一つの生きもののように見なし、その成長や発展を見ていこうとする立場である。ウォーラーステインの「世界システム」論は、モノの

「生産」を重視するということであるため、^{※2}マルクス経済学の影響強く受けている。そのため、初期から^{※3}唯物史観の影響が強いことが指摘されており、ウォーラステイン自身もそのことを認めている。また、細かく歴史を検証する立場の学者からは、おおざっぱすぎるとの意見もある。

一方、歴史人類学は、歴史上の人びとの暮らしの実態を、モノや習慣などを通じて詳しく観察しようという学問である。(シドニー・ミンツ博士など)

この二つの歴史の見方をつなぎ合わせると、近代の世界の動きが具体的によくわかるだろうと考える。

こういう目的のためには、世界中で通用する、砂糖や茶・綿織物は大変都合の良い商品なのだが、そういうモノはほかにもいろいろ考えられる。小麦やコメのような基本的な食糧もあるし、今でいうなら石油や自動車のような商品を通じて、その生産から消費までの全体を注意深く見通すことによって、世界の歴史の動向がわかるはずである。

このように、モノを通じて歴史を見ることで、どんなことがわかるのか。大事なことが二つある。一つは、そうすることによって、各地の人びとの生活の具体的な姿がわかるということである。人々が何を食べ、何を着ていて、どんな所に住んでいたか。どんなことをうれしいと思ひ、どんなことに涙したのか。そうした具体的な生活の局面がわからなければ、私たちはその時代、その地域の人々と共感しあうことはできない。歴史を勉強する大きな目的の一つは、そうした共感を得ることであるから、人々の生活を理解するということは大変重要である。

先に挙げたような商品は、世界中どこでも通用する、つまり、「世界商品」と呼ばれるもので（英語ではステイプル）、これを独占できれば、大きな利益をあげられることは間違いない。したがって、16世紀以後の世界の歴史は、その時々「世界商品」をどこの国が握るかという各国間の競争の歴史として展開してきたというわけである。

そうした「世界商品」の中で、もっとも初期的なものが砂糖であった。したがって、16世紀から19世紀にかけて世界中の政治家や実業家は、砂糖の生産をいかにして握るか、その流通ルートをどのようにして押さえるか、といった問題に知恵を絞ってきたのである。

ブラジルやカリブ海の島々には砂糖生産のために、プランテーションと呼ばれる大農場が造られた。そこではサトウキビの栽培と加工のみが行われ、穀物のような基本的な食糧さえも輸入に頼り、ひたすらサトウキビの栽培に集中したのである。

こうしたプランテーションには、ヨーロッパ諸国の資本、中でもイギリスの資本が注ぎ込まれ、数千万のアフリカの黒人が、ここで奴隷として強制的に酷使されたのである。（奴隷貿易）

ヨーロッパ人が最初に砂糖のことを知ったのは、紀元前4世紀に東方に遠征した、アレクサンドロス大王の兵士たちだと言われている。彼らが北インドに入ったとき、「蜂がつくったのではない固い蜜」を見つけて大喜びをしたという記録がある。この時以来、ごくわずかな砂糖が、隊商を組んだ商人たちによってヨーロッパにもたらされた。

しかし、砂糖の生産がヨーロッパやその他の地域に広く伝播したのは、イスラム教徒によってであった。つまり、砂糖はコーランとともに西へ西へと旅をしたのである。7世紀初め

にアラビア半島で生まれたイスラム教は、たちまち広い地域に普及した。トルコや北アフリカに広まり、711年にはスペインにも侵攻し、地中海の制海権も握ってしまい、732年にフランク王国に敗れなければヨーロッパをも支配してしまうのではないかと思われた。(718・722年から^{※4}レコンキスタ)

こうして西方に広がったイスラム教徒が支配した地域では、サトウキビの栽培と製糖技術が次々と伝えられていったのである。

サトウキビの栽培には、適度な雨量と温度が必要なうえ、その栽培によって土壌の肥料分が消耗して土地が荒れるため、次々と新鮮な耕地を求めて移動しなければならない性質があった。また、サトウキビの栽培とその加工、つまり、製糖は重労働であるばかりか近代的な工場と同じように規則正しい労働集団を必要としたため、これらの土地でも、奴隷又は奴隷に近い強制労働が行われていたと思われる。この二つの特徴は、これから数百年の「サトウキビの旅」にどこまでもついていくことになる。

砂糖と奴隷制度の悪名高い結びつきは、こうしてすでにイスラム教徒が世界の砂糖生産を握っていた時代から始まったのである。エジプトでは、サトウキビ生産が始まると、農閑期になるはずの夏にも厳しい農作業が必要となり、農民の年間の生活習慣、つまり、農事暦が変わったともいわれる。サトウキビが本格的な奴隷制度をもたらし、生活習慣を一変させたという現象は、これ以後、サトウキビ栽培の広まったすべての地域に見られたことである。カリブ海の島々では、アフリカから連れてこられた黒人奴隷が、先住民に代わって人口のほとんどを占めるようになる。

ヨーロッパのキリスト教徒が砂糖のことをかなり詳しく知るようになり、自分たちでサトウキビを栽培するようになったのは、11 世紀末に始まった十字軍運動からだと言われている。ヨーロッパ各地のキリスト教徒が、イスラム教徒に占領された聖地エルサレムを奪回することを目指して参加した、およそ 2 世紀にも及ぶこの運動は、回を重ねるにしたがってその目的があいまいになって行き、13 世紀初めの第 4 回十字軍はエルサレムに行かず、東ローマ帝国の首都であったコンスタンティノープル（現在のイスタンブール）を陥れ、ラテン帝国を形成した。こうして聖地奪回という意味では、十字軍運動は成功とは言えなかったが、7 回に及んだこの大遠征で、ヨーロッパ人はイスラム世界との交易の筋道をつけることには成功した。また、当時、自分たちのそれよりもはるかに高いレベルにあったイスラム世界の文化、特に医学や科学の技術を進んで取り入れることにも成功した。西洋近代の科学の基礎は、こうして築かれたのである。後に「ルネサンス^{※5}」と呼ばれる、ヨーロッパ近代の開始を告げる大きな文化運動は、このことがきっかけで起こったともいわれている。

それまで甘味といえば蜂蜜しか知らなかったヨーロッパ人にとっては、砂糖の強烈な甘さと純白さはなにか神秘的なものに見えたことであろうし、さらにそれが、非常に高価であったこともあって、ますますそれは神秘性を帯びたともいえるのである。こうして、砂糖はヨーロッパ社会に次第に普及していったが、それはごく限られた上流階級のものであった。

イスラム教徒によって東地中海の島々—キプロス・ロードス・クレタ・マルタ・シチリアなど—に広められた砂糖生産は、15 世紀末には大西洋にあるポルトガル領の島々、すなわち、マデイラ諸島・カナリア諸島のほか、西アフリカのギニア湾沖にあるサン・トメ島など

にその中心が移った。これらの島の多くは、かねてワインの生産で知られており、今日でもワインが主な産物となっているが、ひところはアフリカ人奴隷を使ったサトウキビのプランテーションが大規模に展開した。これらの島々はまた、ほとんどがポルトガル人を先頭にした、ヨーロッパ人の対外進出の拠点ともなった。

ポルトガルは、13世紀ごろにいち早くイスラム教徒の支配を脱して独立国となっていたが、15世紀には、「航海王子」とあだ名された^{※6}エンリケ王子の努力で、アフリカ西海岸に進出し、アジアへの航路を目指していた。1415年にアフリカ北岸のセウタを占領したことから始まり、マデイラ、アゾレス諸島など、大西洋沖の諸島はこの王子の時代にポルトガル領となり、1442年には彼らは^{※7}ヴェルデ岬（アフリカ最西端）にまで到達している。その後もポルトガルは1488年にはバルトロメオ・ディアスがアフリカ南端の喜望峰に至り、1498年にはついにヴァスコ・ダ・ガマがこの喜望峰を回ってインドのカリカットに到達し、彼らの待望したインド航路が開かれた。また、1500年には、この航路を通ってインドに行こうとしたペドロ・カブラルが漂流してブラジルに到達している（これによってブラジルはポルトガル領となった）。

ところで、西に向かうサトウキビの旅はこの後も続くのであるが、その担い手はイスラム教徒からキリスト教徒（ポルトガル人）に変わることになったわけである。これらの大西洋の島々でアフリカ人奴隷を使って行われた砂糖生産は、16世紀初めには急成長し、このころ世界経済の中心となる国際市場として、急速に台頭した今日のベルギーにあるアントウェルペン（アントワープ）に製品である砂糖が集められ、そこからヨーロッパ各地に売りさば

かれた。アントウェルペンが世界の中心市場だったので、そこでかなりまとまって取引されるようになった砂糖は、「世界商品」と呼べる状態にかなり近づいたと言える。

初めのうち砂糖は、アジアで採れる香料と同じく貴重品であったが、香料とは違って、ヨーロッパ人自身の手によってプランテーションで栽培されるようになり、その生産量が次第に増やされていった。だから、高級ではあっても広く使われる食品となって次第に普及していったのである。というより、砂糖は誰もが好きで、ほとんど無限に「市場」があったために、この高級食品がプランテーションで大量に栽培、つまり、「生産」できるものであることが分かってくると、ポルトガルを先頭にヨーロッパ諸国は競ってその生産を組織化しようとし、その結果、砂糖は単に薬品や一部の貴族の贅沢品ではなくなっていったのである。

しかし、こうなってくると大西洋の島々はあまりに手狭であったため、ヨーロッパ各国はどこかに新しい、広大なサトウキビの栽培地を求めたのである。コロンブスが西半球に向かったその 2 回目の航海に、サトウキビの苗を携えていったのはこのような事情があったからであり、サトウキビはこうして新世界にもたらされたのである。

1493 年になると、ポルトガルは遅れて国土をイスラム教徒から取り戻したスペインと図り、ローマ教皇を仲介者として勝手に世界を 2 分することを決めてしまった。「教皇分界線」と呼ばれるこの境界線によって南北アメリカなどはスペイン、アフリカやアジアの大半はポルトガル領ということになった。ただし、翌年のトルデシヤリス条約によって西半球の境界が少しずらされた結果、中南米でもブラジルだけはポルトガル領ということになった。

サトウキビの栽培には、膨大な人数の、命令の行き届きやすい労働力が必要だったという

ことと、サトウキビの栽培が地味、つまり植物を育てる土地の能力を、急速に奪う作物であったということは、前にも述べた。このために、サトウキビの栽培には早くから奴隷のような強制労働が使われ、プランテーションのかたちをとる大規模な経営がとられ、新しい土地と労働力を求めて次々と移動がおこなわれていったのである。

地中海に入ったころから、サトウキビの栽培が奴隷制度と結びついていたことは先に述べたが、アメリカに移ってからは一挙にその傾向が強まった。「砂糖のある所に、奴隷あり」とは、後にトリニダード・トバゴのイギリスからの独立運動を指導し、亡くなるまでこの国の首相の地位にあった黒人の偉大な歴史家エリック・ウィリアムズの言葉である。

サトウキビの栽培は、中南米に移ってからも、その中心地が次々と移動し、スペイン領のカリブ海の島々でつくられた始めたサトウキビは、やがてブラジルに移され、そこで大規模に栽培されるようになった。16世紀を通じて、世界の砂糖生産の中心はブラジルであった。それは、労働力としての奴隷をアフリカで獲得できたポルトガルは、砂糖プランテーションを容易に作れたからである。戦国時代の南蛮貿易で日本にもたらされた「金平糖」は、ポルトガル語からきた言葉だと言われている。

しかし、17世紀に入ると、世界を股にかけて活躍し始めたオランダ人が媒介して、サトウキビ栽培はイギリス領やフランス領のカリブ海の島々に移されることになる。前者のバルバドス島や後者のマルチニク島はその典型である。実は、本当の意味で砂糖が「世界商品」となっていたのはこのころからなのである。

ではなぜオランダ人が媒介者となったのか。今日のオランダ・ベルギー・ルクセンブルク

に当たるネーデルランドは、元々スペインの支配下にあったのだが、^{※8}ウィレム沈黙公をリーダーとして16世紀後半に独立運動を開始し、1581年には独立を宣言し、17世紀初めには北部の7州が事実上独立に成功した。これがほぼ今日のオランダに当たる。1588年にはイギリスとの連合軍がアルマダの海戦においてスペインの無敵艦隊を破っており、スペインは制海権を失うことになった。この海戦において活躍した^{※9}ドレーク副提督は、初めは私拿捕船の船長であったが、スペイン・ポルトガル船の略奪を行った結果、エリザベス1世からサーに任じられた。

この背景には、1492年3月31日に出された「ユダヤ教徒追放令」が関係しており、ローマカソリックに改宗しなかったユダヤ教徒の多くはネーデルランドとイギリスに逃げている。1492年当時のスペインの人口は約700万人であったが、ユダヤ教徒及び改宗キリスト教徒は約50万人に過ぎなかったが、都市人口の30%以上はユダヤ系の人々によって占められていた。かくして、追放令発布の1年後にはセビーリャでは市の歳入が3分の1に減り、ユダヤ人ブルジョワジーを失ったバルセロナでは市立銀行の破綻宣言をする羽目になった。ユダヤ人は唯一の収税吏であり、王国の重要な納税者であった。また銀行家、商人、金貸しでもあった彼らは、台頭しつつあったスペイン資本家階級の先鋒だったのである。中世においては、彼らはキリスト教諸王国とモーロ人（北アフリカのイスラム教徒・ベルベル人）との橋渡しを演じ、ユダヤ官僚がいなければ財政が破綻してしまうと、口癖のように言っていた多くのキリスト教王国の金庫のために、収税吏を務めた。そのため、追放令によってユダヤ人を失ってしまったスペインは、中南米から持ち込んだ銀を有効に使うことができず、銀

はスペインを通過するだけでヨーロッパに流れてしまったのである。

北部7州が独立の成功した後も、南部の今のベルギーに当たる地域は独立に失敗し、カソリックのスペインの支配が続いたため、南部にあったアントウェルペンの町や港は急速に衰え、多くのプロテスタントの商人たちが北部のアムステルダムに逃亡し、アムステルダムがたちまち世界経済の中心となった。

アムステルダムを拠点としたオランダ人は、世界の貿易ルートをおさえ、例えば最初に日本にやってきたポルトガルやスペイン人を駆逐して、江戸時代を通じてヨーロッパの国としては唯一日本との貿易を独占することとなった。また、オランダ人は、アジアでは香料の産地として知られていた、今のインドネシア各地に進出し、さらに、北アメリカにも植民地を作るようになった。

特にインドネシアではジャワ島に拠点を置き、香料や日本の金など、アジアの多くの富を集め、世界の商業権をおさえるようになったといわれている。そのような経緯があったため、ポルトガル領であったブラジルにおいてさえ、そこでの砂糖プランテーションの多くが、事実上は、資金の豊かなオランダ商人の手に渡っていたとも言われている。

ところで、プランテーションで働かされた黒人奴隷たちは、どのようにしてカリブ海に連れていかれたのだろうか。16世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパ人がアフリカからカリブ海やブラジル、アメリカ合衆国南部などに運んだ黒人奴隷は、最低でも1000万以上と推計されている。中でも、ポルトガル人とイギリス人、フランス人がこの非人道的な商業を展開したとされる。

多くの黒人奴隷は、ヨーロッパ人によって捕獲されたのではなく、ヨーロッパ人によって鉄砲を与えられた沿岸部の黒人王国の人々による、「奴隷狩り」によって捕まえられた人々であり、ヨーロッパ人によってもたらされる鉄砲、ガラス玉、綿織物などと交換された。アフリカで奴隷を調達したヨーロッパ人は、彼らを船に押し込み、南北アメリカやカリブ海の島々売り、砂糖（他には綿花やタバコ）を仕入れて国に帰り、それを売ることによって多くの富を手にしたのだった。このような貿易を歴史では「三角貿易」と呼んでいる。アジアにおける三角貿易は、^{※10}イギリスから綿織物をインドへ、インドから銀（後にアヘン）を中国へ、中国から茶をイギリスへというものであった。現在のアフリカで見られる民族対立の元凶の一つを、このようなアフリカ人によるアフリカ人の捕獲に求めることもできるだろう。

それまで世界における制海権がオランダからイギリスに移ったのは、17世紀後半から19世紀前半にかけてイギリスとオランダ・フランスとの間で争われた戦争にイギリスが勝利したからである。その結果イギリスは、インド・北米大陸を中心に広大な植民を獲得した。同時にイギリスでは17世紀に他国に先駆けて^{※11}市民革命が起こり、工場制手工業（マニュファクチュア）が発達するとともに、農業技術の進歩に加え、都市人口の増大などで穀物の需要が増した。このため、第二次エンクロージャーが起こり、近代のイギリス農業を支えていた独立自営農民は消滅し、彼らの多くは農業労働者（小作人）となるか、都市へ流出して工場労働者となった。こうして豊富な労働力と、制海権を得たことによる北アメリカ南部などからの綿花の供給による綿織物の大量生産、また、カリブ海地域などから送られてきた砂糖の販売による莫大な富が一体化したことによって、^{※12}産業革命がまずはエリザベス1世の註に

ある、それまでの毛織物工業に代わって木綿産業からイギリスにおいて始まったのである。前述のように、砂糖は当時の人であれば誰でも欲しがるものであったので、市場は当時の交易状態などを勘案するとほぼ無限であったといえるが、プランテーションによる大量生産が可能となったため、価格は庶民でも手の届くものとなっていた。

ここで砂糖と茶が一体化することになることを考察する。工場労働者となった元農民には、時間通りに働くことが求められた。農業と異なり、工場での労働は天候に左右されることなく、計画的に行われたからである。そのため、遅刻者には厳しい罰金が科せられた。そこで工場労働者となった元農民たちは、朝からシャキッと働けるようにカフェイン（興奮剤・利尿剤になる）を含む紅茶と、カロリーの高い砂糖を一緒にして摂取することによって、活力を得たのである。このことが、現在のイギリスにおける紅茶文化に一因になっていると言える。

一方、砂糖プランテーションが行われたカリブ海の島々では、砂糖以外のものは基本的には作られなかったため、1804年のハイチの独立後、次々と多くの独立国が生まれたが、砂糖一辺倒の^{※14}モノカルチャ経済となってしまうために、他の産業の発展はなく、現在においても発展途上国として通り残される結果となってしまったのである。

このように見ても、砂糖というひとつのモノを取り上げてその歴史を追ってみることによって、いわゆる「世界商品」と呼ばれるものが、世界の歴史に大きな影響を与えたということがよく分かってもらえると思う。

註

1 カロリング朝：フランク王国後期の王朝。メロヴィング朝（フランク王国初の王朝）時代にアウストラシアの^{きゅうさい}宮宰として成長し、751年ピピン（3世）がローマ教皇の同意を得て王位についた。その子カール1世（大帝）は大領土を統合し、教皇より西ローマ帝位を授与された。以上の前半期が王権伸張と国家統合の時代であり、ゲルマン・ローマ・キリスト教の3要素が結合したといえる。ついで後半期は王権衰微と国家分裂の歴史であった。ヴェルダン条約（843年8月、フランク王国の3分割を約束した条約）・メルセン条約（870年の、フランク王国の3分割を最終的に決定づけた条約）によって国土は東フランク・西フランク・イタリアに3分された。東フランクは911年に、西フランクは987年に断絶した。

2 マルクス経済学：唯物史観の立場に立って資本主義経済の運動法則を分析し、資本主義社会から社会主義社会への移行の必然性を明らかにした。

3 唯物史観：生産力と生産関係の矛盾が社会発展の原動力であるとする考えが前提。歴史上の社会は、生産様式によって規定され、生産力の発展によって生産関係も変革され、この結果、やがて政治・経済・法律や文化の変化が導かれとする考え方。

4 レコンキスタ：キリスト教徒によるイベリア半島からのイスラム勢力の^{くちく}駆逐運動。1492年1月2日にグラナダの陥落で完成。

5 14世紀から16世紀にかけてイタリアを中心におこった、古典文化を手本とする人間性尊重の文化運動。

6 エンリケ王子：1394～1460年。ポルトガルのジョアン1世の子。

7 ヴェルデ岬：セネガルの首都であるダカールがあることで知られる。

8 ウィレム沈黙公：1533～84年。オランダ独立運動の指導者で初代総督。スペインのフェリペ2世の専制政治を批判し、市民階級と結んで独立運動をおこし北部7州とユトレヒト同盟（オランダ独立戦争中にネーデルランド北部7州が結んだ同盟。1571年）を結成後、初代総督に就任。1581年に独立を宣言してネーデルランド連邦共和国を成立させる。

9 ドレーク船長（1543年ごろ～96年）：私拿捕船（privateer）の船長としてスペイン・ポルトガル船の略奪を行い、[※]エリザベス1世からサーに任じられた。また、スペインの無敵艦隊との海戦（アルマダの海戦）では副提督として活躍し、無敵艦隊の撃滅に寄与している。

エリザベス1世（在位1558～1603年）：内政においては枢密院を中心^{すうみつ}に有能な政治家を登用し、毛織物工業を育成・奨励^{しょうれい}した。その結果、羊の増産のために牧草地を拡大するためにエンクロージャー（共同利用が認められている耕作地や未開墾地などを柵・生け垣などで囲み、他人の使用を認めない私有地であることを表示する行為）が行われたために土地を追われた多くの農民が浮浪者となって治安上の問題を起こしたが、1601年に「救貧法」を定め、浮浪者を救済して毛織物工場への労働力供給を図った。貿易においては[※]重商主義を採用し、1600年に「イギリス東インド会社」を設立して喜望峰以東の貿易・植民地の独占権を与えた。また、商業振興の基盤である貨幣制度の統一や悪貨の改鑄^{かいちゆう}を断行した。外交では結婚によって外国勢力への従属が生じる恐れをなくすため、生涯独身であった。そのために言った「朕はイギリスと結婚した」は有名。このようにして平和的外交を装ったが、裏では私拿捕船に特許状を与えて他国の船（特に新大陸からのスペインの銀船隊）への海賊行為

を公認・奨励した。

10 イギリスから綿織物をインドへ：イギリスで毛織物工業が盛んになると、製品をヨーロッパ諸国に輸出するようになったが、市場が飽和状態となったために新たな市場を求めてインドでの売り込みを図ったが、インドには綿織物という洗濯がしやすく色付けの容易な優れた布があったため、イギリスの毛織物は相手にされなかった。そこでインドから綿織物を輸入するようになり、さらに需要が高まると北アメリカ南部で栽培された綿花をイギリスに運び、綿織物として生産し、輸出するようになっていった。

11 オランダ・フランスを破って：英蘭戦争と英仏植民戦争を指す。前者は17世紀後半に制海権を競って3回行われた。第1次…1652～54年、ピューリタン革命後、クロムウェルが航海法を發布（1651年）してオランダ商業の排撃を目指したために勃発した。その結果、イギリスが勝利を得てウェストミンスター条約（1648年10月にドイツのウェスファリア地方のオスナブリュックで結ばれた^{※15}三十年戦争の講和条約）を締結し、オランダの経済衰退を促した。第2次…1665～67年、王政復古後、イギリスはオランダ総督家（オランダ家）と結んでアムステルダム商人やその海外植民地を圧迫。1664年、北米大陸のニューアムステルダム占領し、ニューヨークと改めた。そこで翌1665年開戦となり、オランダ優勢のうちに終結した。イギリスは東インド諸島の権利を放棄したが、^{ほうき}ニューヨークを獲得。第3次…1672～74年、フランス王ルイ14世がイギリス王チャールズ2世とドーバーの密約を結び（1670年）、オランダ侵略を企てたことから開戦となった。オランダはフランスの攻撃を受けて苦境に立ったが、イギリス国内に反対の声が高まり、再度ウェストミンスター条

約の締結確認で講和を結んだ。この結果、オランダの海上優位は完全にイギリスに移った。

後者は 1689 年から 1815 年にかけての植民地争奪と、海上権確保のための一連の戦争。

ウィリアム戦争に始まり、スペイン継承戦争、アメリカ独立戦争、などを経てナポレオン戦

争までをさすが、結局、イギリスの勝利に終わり、イギリス帝国の成立を可能にした。

12 市民革命：ピューリタン（清教徒）革命と名誉革命。前者は、1642 年～60 年に行われた、ステュアート朝の絶対主義に対する市民革命。後者は 1688 年から 89 年にかけて行われたイギリスの市民革命。

13 産業革命：近代資本主義確立の契機となった、18 世紀後半からの約 1 世紀に起こった生産技術上の急激な革新と、それに伴う社会・経済上の変革。

14 モノカルチャ：特定の一種類の作物のみを栽培すること。

15 三十年戦争：1618 年から 48 年まで、ドイツの宗教対立を契機とする紛争にヨーロッパ各国が参加した戦争。最後で最大の宗教戦争。

重商主義：16 世紀から 18 世紀のヨーロッパ諸国が国富の増大を目指して推進した、統制的経済政策。初期のものは重金主義といわれ、貨幣そのものの獲得を重視して、正貨・貴金属の輸出禁止、植民地における鉱山開発による地金・銀の獲得を目指した。後期においては、貿易差額による貨幣の蓄積を重視し（貿易差額主義）、国内輸出産業の保護育成、輸出の奨励、保護関税による輸入制限、植民地の獲得などが行われた。しかし、資本主義の発展とともに、自由貿易・自由放任主義（レッセ・フェール）にとって代わられた。